

# 可能性秘めたツール チャットGPTー活用には課題も

## ■役員研修会講演要旨

昨年11月26日、栗田町内会は栗田ふれあい会館で役員研修を実施、理事、副理事、公民館役員など約50人が出席しました。

研修は、今話題のチャットGPTについて、講師は外資系コンピューターメーカーに勤務した経歴を持つ倉石修二郎さん（74歳、吉原在住）にお願いしました。当日の講演要旨を掲載します。

☆

最初にAI＝人工知能についてお話します。AI (Artificial Intelligence) とは計算という概念とコン

ピューターという道具を用いて「知能」を研究する計算機科学の一分野、と定義づけられています。

近年「生成AI」という言葉をよく耳にしますが、これはあらかじめ学習したデータをもとにいろいろなもの、つまりテキスト（文



講師の倉石修二郎さん

章)、画像、動画、楽曲、ソフトウェアプログラムなど多岐にわたり作成するAIのことです。

今回のテーマ「チャット(chat) GPT」は、インターネット検索エンジン(インターネットで物事を調べる道具)の一種で、2022年にアメリカの企業・OpenAI社が「自動会話プログラム」として公開しました。

従来の検索エンジンと異なるのは、これまでの検索エンジンが、問いに対し、それに関連するホームページの所在を表示するのに対し、チャットGPTはテキスト形式で答えそのものを

表示(自動会話)するものです。

チャットGPTは、公開からわずか2か月で世界のユーザー数が1億人に達し注目されました。現在では各分野で大きな広がりを見せています。

経済分野では、利用動向調査によると2023年夏の段階で、チャットGPTはアメリカでは半数の利用があるのに対し、日本では新技術を積極的に利用しようという企業がある一方、全体では7%程度にとどまっています。行政分野でも日本では業務効率化のメリットと、個人情報や機密情報漏洩リスクなどのデメリットを測りかねている状況にあります。

教育分野では、多くの関係者がチャットGPTのよくなる生成AIが教育にもたらす影響が非常に大きいことを懸念し、利用を禁止する大学もある一方、生成A

Iを教育に活用しているという考えもあるという状況です。

ある地方IT企業の担当者によると「チャットGPTの活用はまだ課題もあり、本格的な利用はこれから」ということです。一つは学習させるモデルから、いかにより良い回答を得られるかという点で、オリジナル性の高い、目的に即したものを得るためには、それなりの細かい独自情報を指示(入力)することが必要になります。

結論としては、チャットGPTを含む生成AIは可能性のある技術の一つですが、あくまでも道具であり、活用するかどうかは、その時点、時点で使う人が判断すべき、ということだと思えます。

その上で、ぜひこの機会に興味を持っていただき、できれば一度トライしてみてください。